

# 中川一政 略年譜 1893(明治26)年 — 1991(平成3)年

- 1893(明治26)年 2月14日、東京市本郷区駒込西片町(現・東京都文京区西片)に生れる。父中川政朝は金沢の刀剣鍛冶松戸家、母スワは松任・相川新村(現・白山市相川新町)の農家清水家の出身。
- 1902(明治35)年 9歳 母・スワが死去(享年33歳)。
- 1903(明治36)年 10歳 東京市北豊島郡巢鴨村向原(現・豊島区東池袋 サンシャインシティのあたり)に転居する。
- 1905(明治38)年 12歳 姉・喜代子が死去(享年17歳)。
- 1907(明治40)年 14歳 本郷区誠之尋常高等小学校を卒業し、神田錦町の錦城中学校に入学する。
- 1908(明治41)年 15歳 『少年世界』の表紙図案に入選する。与謝野晶子撰歌集『白光』(1908年新潮社)に歌3首が収録される。
- 1909(明治42)年 16歳 中村琢郎、前田夕暮、富田碎花、石川啄木、尾上柴舟、斎藤茂吉らと知遇を得る。
- 1910(明治43)年 17歳 『スバル』や『創作』に短歌が紹介される。
- 1911(明治44)年 18歳 『萬朝報』の懸賞小説に自伝的短編小説「椎の樹」が当選し掲載される。歌人三ヶ島葎子を知
- 1912(明治45)年 19歳 錦城中学校を卒業する。『萬朝報』の懸賞小説に「蝮蛇の歌」が当選し掲載される。
- 1913(大正 2)年 20歳 中村星湖の推薦で『早稲田文学』に短歌「逝春」を発表する。以後、同誌に詩を中心に発表を重ねる。富田碎花の招きで兵庫県芦屋の斎田家に約1年半滞在する。この頃、聖書を読み、『白樺』を耽読する。
- 1914(大正 3)年 21歳 知人からイギリス製の油絵具一式を贈られ、灘・深江の酒倉を描く。この処女作油彩《酒倉》は「巽画会第14回展」に出品され、岸田劉生の推薦で入選。身近な風景を写生する日々を送る。
- 1915(大正 4)年 22歳 「巽画会第15回展」に《霜のとける道》ほかを出品し、最高位二等賞銀牌を受賞。「二科会第2回展」に《春光》ほかを出品し、入選する。また、岸田劉生を中心とする「草土社」に参加する。この頃、武者小路実篤、志賀直哉ら白樺派の人々と出会い、当時『白樺』によって紹介されたヴァン・ゴッホやポール・セザンヌに触発される。
- 1916(大正 5)年 23歳 同人誌『貧しき者』を創刊し、詩や随想を発表する。
- 1917(大正 6)年 24歳 「二科会第4回展」に《風景[杉と茶畑]》を出品し、入選する。  
同人雑誌『観照』特別号として「中川一政詩集」が刊行される。
- 1918(大正 7)年 25歳 「二科会第5回展」に《冬[初冬]》《夏》を出品し、入選する。
- 1919(大正 8)年 26歳 「二科会第6回展」に《下板橋の川辺(冬)》[板橋風景]ほかを出品し、入選する。
- 1920(大正 9)年 27歳 初の個展「中川一政個人展覧会」(神田・兜屋画堂)を開催。石井鶴三を知る。「二科会第7回展」に《自画像》ほかを出品し、入選する。
- 1921(大正10)年 28歳 詩集『見なれざる人』(叢文閣)出版。この出版は有島武郎の薦めたことを後に知る。三ヶ島葎子の歌集『吾木香』の装丁を担当する。以降、多くの装丁を手掛ける。「二科会第8回展」に《静物》などを出品し、二科賞を受賞する。
- 1922(大正11)年 29歳 小杉未醒(放菴)、萬鉄五郎、石井鶴三、木村荘八、岸田劉生らと「春陽会」設立に参加する。以降、88(昭和63)年までほぼ毎年出品を続ける。
- 1923(大正12)年 30歳 関東大震災。妻・伊藤暢子(建築家・伊藤為吉の娘、舞台演出家・千田是也は弟)と結婚す
- 1924(大正13)年 31歳 長女桃子誕生。  
短歌雑誌『日光』の同人となる。
- 1925(大正14)年 32歳 訳著『ゴオホ』(アルス)を出版する。東京府和田堀之内村永福寺隣(現・杉並区永福)に転居
- 1926(大正15)年 33歳 初の画集『中川一政畫集』(アトリエ社)を出版する。
- 1927(昭和 2)年 34歳 長男鋭之助誕生。小杉放菴発起の「老荘会」で漢学者・公田連太郎から中国古典を学び始める。この講義は45(昭和20)年まで続いた。
- 1928(昭和 3)年 35歳 東京朝日新聞に連載の片岡鉄兵「生ける人形」の挿画を担当する。
- 1930(昭和 5)年 37歳 随筆『美術の眺め』(アトリエ社)を出版する。以降、晩年まで多くの随筆集、画文集を出版。
- 1931(昭和 6)年 38歳 二男晴之助誕生。個展「中川一政水墨展」(麴町・倉橋藤治郎邸)を開催する。  
佐藤春夫、日夏耿之介と同人文芸誌『古東多万』を創刊。
- 1932(昭和 7)年 39歳 『セザンヌ大画集』第3巻 静物(アトリエ社)の編集を手掛ける。
- 1933(昭和 8)年 40歳 『美術方寸』(第一書房)を出版する。  
都新聞に連載の尾崎士郎「人生劇場 青春篇」の挿画を担当する。
- 1934(昭和 9)年 41歳 随筆『永福寺余暇』、随筆『武蔵野日記』(ともに竹村書房)を出版する。都新聞に連載の尾崎士郎「人生劇場 愛慾篇」の挿画を担当する。
- 1935(昭和10)年 42歳 三男菊之助誕生。
- 1936(昭和11)年 43歳 都新聞に連載の尾崎士郎「人生劇場 残侠篇」の挿画を担当する。  
随筆『庭の眺め』(竹村書房)、随筆『旅窓読本』(学芸社)を出版。
- 1937(昭和12)年 44歳 小川芋銭、小杉放菴、菅楯彦、矢野橋村、津田青楓らと「墨人倶楽部」を結成する。随筆『一政随筆』(学芸社)を出版する。
- 1938(昭和13)年 45歳 都新聞に連載の尾崎士郎「石田三成」の挿画を担当する。随筆『顔を洗ふ』(中央公論社)を出版する。第2回文部省美術展覧会(新文展)第二部審査員を委嘱される。以降、第3回(39年)、第4回(41年)、第6回(43年)同展の審査員を委嘱される。
- 1939(昭和14)年 46歳 初の中国旅行で鹿島龍蔵と北京、ハルビン、熱河、大同を巡る。  
都新聞に連載の尾崎士郎「人生劇場 風雲篇」の挿画を担当する。  
「第3回新文展」に審査員として《樹の下の子供[樹下子供]》を出品する。
- 1940(昭和15)年 47歳 父・政朝が死去(享年79歳)。紀元二六〇〇年奉祝美術展覧会委員を委嘱され、同展に《樹の上の少年》を出品する。藤田嗣治、石井柏亭、鍋井克之、津田青楓、牧野虎雄、小杉放菴、石井鶴三、木村荘八らと邦画一如会を結成する。
- 1941(昭和16)年 48歳 「第4回新文展」に審査員として《新劇女優》を出品する。
- 1942(昭和17)年 49歳 随筆『美しい季節』(桜井書店)、随筆『一月桜』(錦城出版社)を出版。

- 1943(昭和18)年 50歳 「第6回新文展」に審査員として《田園五月》を出品する。  
「石井鶴三・中川一政水墨展」(京都・南禅寺無鄰庵)を開催。春陽会の教場が開設され教場長として指導にあたる。
- 1944(昭和19)年 51歳 「中川一政新作展」(本郷・大勝画廊)が開催される。以降、最晩年までほぼ毎年のように個展、新作展で作品を発表し続ける。
- 1945(昭和20)年 52歳 疎開先の富山県高岡に約1か月滞在し、山形県酒田を経て宮城県黒川郡宮床村(現・大和町宮床)で終戦を迎える。
- 1946(昭和21)年 53歳 随筆『山の宿』(八雲書店)を出版する。
- 1947(昭和22)年 54歳 随筆『我思古人』(靖文社)、随筆『歳々年々』(自在書房)、画文集『篋中デッサン』(建設社)を出版する。
- 1948(昭和23)年 55歳 武者小路実篤を中心に結成された生成会に同人として参加、文芸雑誌『心』が創刊される。
- 1949(昭和24)年 56歳 神奈川県足柄下郡真鶴町にアトリエを設ける。以降、約20年にわたり、アトリエから程近い「福浦港」(湯河原町)の連作に取り組む。
- 1950(昭和25)年 57歳 随筆『香爐峯の雪』(創元社)を出版する。
- 1953(昭和28)年 60歳 初の洋行で、約5か月にわたりブラジル、フランス、イタリア、イギリスを歴訪。東京新聞夕刊文化欄に旅行記を41回にわたり連載する。以降、晩年まで渡欧を重ねる。
- 1954(昭和29)年 61歳 随筆『見えない世界』(筑摩書房)を出版する。
- 1955(昭和30)年 62歳 紀行文『モンマルトルの空の月』(筑摩書房)、随筆『猫と人間』(朋文堂)を出版する。
- 1957(昭和32)年 64歳 『鉄斎』(筑摩書房)を武者小路実篤、梅原龍三郎、小林秀雄とともに監修、出版する。
- 1958(昭和33)年 65歳 随筆『正午牡丹』(筑摩書房)を出版する。「光琳生誕三〇〇年記念展」が北京で開催され、訪中団団長として訪問する。東京新聞夕刊文化欄に「中国遊記」を7回にわたり連載する。
- 1959(昭和34)年 66歳 随筆『道芝の記』(実業之日本社)を出版。  
三男・菊之助が死去(享年24歳)。
- 1960(昭和35)年 67歳 全国知事会の依頼で《漁村凱風》を制作、東宮御所に献納される。
- 1961(昭和36)年 68歳 宮中の歌会始に召歌を詠進する。「わかき日は馬上に過ぎぬ残る世を楽しまむと云ひし伊達の政宗あはれ」(御題「若」)
- 1962(昭和37)年 69歳 ミュンヘンのバイエルン独日協会の招きで渡欧、ミュンヘン市立美術館で「東洋美術の考え」を講演する。
- 1963(昭和38)年 70歳 「現代日本油絵展」が北京、上海で開催され、訪中洋画家団団長として訪問する。週刊新潮に連載の尾崎士郎「一文士の告白」の挿画を担当する。随筆『うちには猛犬がゐる』(筑摩書房)を出版する。
- 1964(昭和39)年 71歳 日中文化交流協会代表団として訪中し、中国建国15周年を祝う国慶節式典に参列する。
- 1965(昭和40)年 72歳 ソ連文化省の招きでソ連を訪問し、同国の美術演劇事情を視察する。東京新聞夕刊文化欄に「私のソ連・欧州旅行」を8回にわたり連載する。
- 1967(昭和42)年 74歳 朝日新聞に連載の大佛次郎「天皇の世紀」(1967～71年)の挿絵を、安田鞞彦、奥村土牛、杉山寧、小野竹喬、山口蓬春、橋本明治、鍋井克之、宮本三郎、高山辰雄、上村松篁らと分担し『中川一政画集』(朝日新聞社)、随筆『遠くの顔』『近くの顔』画文集『中川一政書蹟』(以上、中央公論美術出版)を出版。箱根芦ノ湖の山伏峠から描く《駒ヶ岳》の連作を始める。初となる書展「中川一政書展」(銀座・松屋)を開催する。
- 1969(昭和44)年 76歳 この一年間、静養をかねて自由に研究制作をするため、すべての出品を休む。
- 1970(昭和45)年 77歳 妻・暢子が死去。(享年68歳)
- 1971(昭和46)年 78歳 『中川一政挿絵(天皇の世紀)』(中央公論美術出版)、挿絵『さしぬ人生劇場』(求龍堂)を出版する。
- 1972(昭和47)年 79歳 『中川一政画集 1972』(筑摩書房)を出版する。  
弟・正儀が死去(享年76歳)。
- 1973(昭和48)年 80歳 墨彩画集『門前小僧』(求龍堂)を出版する。
- 1974(昭和49)年 81歳 『書の本』『一政印譜』(ともに求龍堂)を出版する。  
日本経済新聞「美の美」の欄に「静物画十選」を連載する。「中川一政展」がパリ・吉井画廊で開催される。
- 1975(昭和50)年 82歳 日本経済新聞文化欄に「私の履歴書」を32回にわたり連載する。『中川一政全集』(全5巻／筑摩書房)、『腹の虫』(日本経済新聞社)を出版する。中国文化交流使節日本美術家代表団名誉団長として訪中する。文化功労者に選ばれ、文化勲章を受章する。
- 1976(昭和51)年 83歳 『中川一政装釘』(中央公論美術出版)、『中川一政画集 1976』(筑摩書房)を出版する。
- 1977(昭和52)年 84歳 『対談』(求龍堂)を出版する。
- 1978(昭和53)年 85歳 『私は木偶である』(車木工房出版部)を出版する。
- 1979(昭和54)年 86歳 墨彩画集『花下忘帰』(求龍堂)を出版。
- 1980(昭和55)年 87歳 中川一政米寿を祝う会が帝国ホテルで行われる。以後、恒例となり1988年までつづく。『随筆八十八』(講談社)を出版する。
- 1981(昭和56)年 88歳 『中川一政画集 八十八』(講談社)を出版する。  
「中川一政展(私の遍歴)」(日本橋・高島屋)を開催、京都・大阪・尾道・名古屋を巡回する。
- 1982(昭和57)年 89歳 「中川一政(現代洋画壇の巨匠)」(秋田市美術館)を開催する。日中文化交流協会代表団の顧問として訪中する。
- 1983(昭和58)年 90歳 「中川一政展」(酒田・本間美術館)を開催する。  
銅版画集『胡風人馬』(車木工房)を出版する。
- 1984(昭和59)年 91歳 『随筆 画にもかけない』(講談社)、『中川一政ブックワーク』(形象社)を出版する。妹・岩田愛子が死去(享年79歳)。東京都名誉都民の称号を受ける。
- 1985(昭和60)年 92歳 随筆『つりおとした魚の寸法』(講談社)を出版する。

- 1986(昭和61)年 93歳 石川県に松任市立(現・白山市立松任)中川一政記念美術館が開館する。松任市名誉市民の称号を受ける。『中川一政全文集』全10巻(中央公論社)が刊行される(～1987年)。
- 1987(昭和62)年 94歳 「中川一政特別展」(金沢・石川近代文学館)が開催される。
- 1988(昭和63)年 95歳 朝日新聞夕刊文化欄に「随筆雑文」を5回にわたり連載する。北國新聞に1月3日より122回にわたり「獨行道 中川一政さんが語る自画像～美の源泉」を連載する。
- 1989(平成元年) 96歳 神奈川県に真鶴町立中川一政美術館が開館する。『中川一政近作画集 第一』(中央公論社)を出版する。
- 1990(平成2)年 97歳 妹・山本芳子が死去。『中川一政近作画集 第二』(中央公論社)を出版する。パリ市立カルナバレ博物館で「現代日本絵画巨匠二人展/奥村土牛・中川一政」が開催される。
- 1991(平成3)年 2月5日、心不全のため永眠。(享年97歳)墓所 雑司ヶ谷霊園(東京・池袋)に眠る。真鶴町名誉町民の称号を受ける。

※この略年譜は、『中川一政油彩全作品集』(2007年 美術出版社)収録の中島理壽氏編「中川一政年譜」及び『没後20年 中川一政展 独行此道』(2011年 NHKサービスセンター)収録の中川達郎氏編「略年譜 中川一政」を基に編集しました。